

文法（理論・現代）

南 不二男

はじめに——研究の大勢

おそらく一九六〇年代から一九七〇年代の終りまでは、いろいろな観点からの現代日本語の文法研究の成果がさかんに発表された時期であったといっていだらう。この傾向は世界の諸言語についても同様で、その有力な推進力となったものの一つは、生成文法の理論の発展だったことは疑いないと思うが、現代日本語の場合はそれほどばかりではない。生成文法以外の立場からする研究も積極的におし進められた。

ところで、この展望の範囲の一九八〇年および一九八一年は、ごく大きっぱに見られるところ、それまでの研究の勢いにやや沈静化のよすがが見られるような気がする。一種の反省期あるいはつぎの発展のための準備期とでも称すべきか。発表された論文の数はけっしてすくなくはない。雑誌で文法関係の特集をしたものもある（『言語』一〇—一、二、『国語と国文学』五八—五）。あとで紹介するように二、三の大きな仕事の出版もあった。しかし、考え出された新しい理論によって文法現象の何から何まですべて説明しきれぬにちがいないといった熟っぽい信仰は影をひそめたように見える。また、な

にか文法上の問題についてたくさんの人たちが雑誌などで議論に熟中することもなかったようだ。

「このところ昔の文法書の復刻がちょいちょい出るのは、そうした反省期的性格の現れ」とある若い友人が言ったが、あるいはそうかもしれない。大槻文彦一九八〇（一九九七）、国語調査委員会（編）一九八〇（一九一六・一九一七）、松下大三郎一九八〇（一九〇二）などがそれである。また森野・小松・北原（編）一九八〇は、佐伯梅友の文法の形成過程とその性格を概観したものだ、その中で佐伯の手になる各種文法教科書の復刻が大きな部分を占める（一三一—九〇〇頁）。ついでにいうと、北原・鈴木・武田・増淵・山口（編）一九八一および北原保雄（編）一九八二の出版も、こうした見直しの時期にふさわしい仕事だったといえるだろう。

大きな仕事三つ

まとまった仕事としては、まず北原保雄の二つの作品をあげなければならぬ（北原一九八一 a、一九八一 b）。すぐ前にもあげたように、北原には北原他（編）一九八一および北原（編）一九八二があり、この二年間は彼の活躍がめだつた時期であった。

はじめに北原一九八一bを取り上げる。これは北原の年来の助動詞研究の集大成である。大きく四つの部分に分かれていて、序章

(助動詞とは何か—助動詞は品詞として認められるか—)、本編I(助動詞についての構文論的考察)、本編II(助動詞の分類) および終章(助動詞研究のまとめと残された課題) からなる。北原の基本的な立場がもつともよく現れているのは、本編Iである。すなわち、助動詞をそれだけ切りはなして考察の対象にするというのではなくて、文の構造中の要素としてその性格を分析しようとするのである。述語の部分における各種助動詞の承接上の位置と、主語その他述語以外の諸成分の並び方(語順)とをつき合わせ、それらの間の呼応関係に基づいて文の構造にいくつかの層(段階)を認めるところに特色がある。この本は書名は助動詞の研究だが、北原の日本語シンタックスの本とみなしてもよいものだと思う。北原には以前本誌八三号に掲載された論文があつて(北原一九七〇)、それが本編Iのものになつている。筆者は、本誌八九号で一九七〇、一九七一兩年の展望を担当した際それを取り上げたのだが、ここでまたそのまとめを紹介するめぐりあわせとなつた(以後、八九号の筆者の展望を「前稿」と呼ぶ)。

北原が説くような文の構造をいくつかの層(段階)からなるものとしてとらえようとする見方については、筆者も北原とは別の手からかりから同じような仮説を提案しているの、今後こうした方向の考え方に基づく分析がさらに推進されることを願うものである。それについてはさらによく検討しなければならない問題がすくなくないことはいうまでもない。その一つをあげるならば、そうした構造上の層(段階)の区別が、いつも表層的な要素の形に反映されている

ものなのかどうかということがある。表層的には一つの(形と見える)要素がいくつかの層を代表していることもあるのではないか。

北原一九八一aは、中央公論社日本語の世界シリーズの一つとして書かれたもので、専門的な研究者以外の一般読者をも対象としてゐる。最初の二章で文法についての一般論を述べ、第三章から第五章までを日本語の文の構造の輪郭の記述にあてる。その中心をなすのは、すぐ前に紹介した文の構造を重層的なものとして把握しようとする見方である。このあといくつかの特定の問題を取り上げた数章が続いている。すなわち主語、ハとガ、うなぎ文の構造、客体的表現と主体的表現。この本はそれまで日本語の文法研究と縁がなかつた読者がいきなり読むには、その内容が専門的に過ぎる感じがする。これをよく理解するためにはある程度の予備知識を必要とするし、同時に山田、時枝、橋本、松下などの文法をいくらかでも読むことを強いられるであろう。それはとにかく、伝統的な国文法の立場に立ちながら新しい見方(文構造の重層観)を提示した概説書が出たことを筆者は喜ぶものである。この本は、内容、大きさからいって生成文法の立場から書かれた柴谷方良一九七八にあたるものということも出来るだろう。ついでにいえば、この柴谷一九七八は、文の構造のすべての問題をカバーしていないけれども、随処にくわしい分析を示しながらかつ全体としてバランスのとれた好著であつた。もっとも、残念ながらその刊行時期がこの展望の範囲からははずれる。

仁田義雄一九八〇は、彼がそれまでに発表した論文を I-Lexico-Syntax への誘ひ、II 表現形式と意味解釈、III きめの細かい文法記述をめぐりして、IV 語彙論・意味論への貢献の四つの部分に分けてま

とめたものである。さまざまな論文が収められているが、その中で彼の仕事の代表的なものの一つとしては、Iの2「結合働文法素描——Lexicon-Syntaxの「試み」」をあげることができるだろう。

この仁田の研究の背景には、一九六〇年代後半から一九七〇年代はじめにかけて言語研究の世界で注目をあびた格文法の理論あるいはValenztheorieの考え方がありと思われる。彼の理論モデルは「語詞の潜在的な結合能力を中心に、文の生成モデルを示そうとするもの」(一七頁)であって、分析の対象は動詞と名詞句の格関係、時や場所の状況成分、様態、頻度、目的などの付加成分その他におよぶ。その中で比較的考察がくわしいのは格関係である。その暫定的な結果として示されているのは、動作主、対象、あい方、場所(着点)、場所(離点)、場所(空間)、場所(位置)、原因、手段といった常識的なとらえ方によるものである。両方降ルの両方を patient とする^(註)といった、ふつうのあたまたまの人間をびっくりさせるような分析は見あたらない。常識的な行き方を是とするか、非常識(?)な考え方に興味を持つかは別として、この仁田の分析にはまだ検討を要する余地が多いように思われる。もっとも、ずいぶん前に発表した「暫定的な結果」を今ごろうんぬんされることは、本人にとっては不本意なことであろう。

そのほか、まとまった著書としては牧野一九八〇、池上一九八一年があるが、これは別のところで取り上げる。

研究のいろいろな方向

前稿で筆者はその時点から見た将来の文法研究の問題点をいくつか指摘した。そのうちの二、三の点に関しては、それ以後の研究の

進展に見るべきものがあつた。

その一つは、各種の連語の意味の分析である。これは当時すでに筆者が伝統的写実派と呼んだ研究者たちや、言語情報処理関係の人たちによる仕事に相当進んでおり、その後もまとまった成果の発表もいくつかあつた。しかし、今度の展望の範囲の二年間は、伝統的写実派の人たちの発表も一休みの感がある。それでも、すぐ前にあげた仁田一九八〇の諸論文にはこのカテゴリーにはいるものがすくなくないが、もう一つ付け加えるとなれば、村木一九八〇がある。

これは、(ニオイガ)スル、(連絡ヲ)トル、(注目ヲ)アツメルなどの「機能動詞」(実質的な意味はそれと結び付く名詞が表し、それ自身はもっぱら文法的な働きを表すために使われる動詞)を、文法上のさまざまな面から考察したものである。

また前稿では、分析の対象を文にかぎらず、文以上の単位——文章(談話、discourse)にも目を向ける必要があることを述べた。この方面の研究もその後かなりの進展があつた。久野一九七八は、そのまとまった成果の一つとしてよく知られているものである。この二年間は、この種の研究の発表は非常にさかんであつたとはいえないが、その中で牧野一九八〇は興味深い仕事であつた。これは、言語表現上の反復現象をおもに日英両語を対比しながら考察したものである。反復は当然談話の構造にかかわる問題だが、文内部の構造についても多くの点がこまかく検討され、さらに、比較文化的な考察も付け加えられている。談話を視野に入れた文法研究では、単に文と文との関係や、文内部の要素の現れ方に直接かかわる談話の構造上の現象を部分的に取り上げるだけでは十分でない。談話全体の構造をまずとらえて、その中で文の位置から文そのものの構

造におよぶ理論の枠組を考える必要があると思う。最近では具体的な資料に基づく談話についてのさまざまな研究の試みが行われて、その成果も発表されるようになってきた(たとえば入谷一九八二)。この方面の研究の今後を期待したい。

前稿でそのほかに指摘したことの一つは、文法研究にも社会言語学的研究(または言語生活の研究)の視点から得られた情報を今までの以上に取り入れることが必要になるだろうということである。この方面では、まだ現代日本語について体系的かつ具体的な研究成果が現れているとは言い難い。しかし、その必要性のはっきりした指摘と海外における研究の紹介があった。サン・ジャック一九八二がそれで、そのもとは一九八一年秋の国語学会での講演である。サン・ジャックは、一九七九年三月にアメリカ、ウィスコンシン大学で行われた Conference on Current Approaches to Syntax での発表を紹介しながら現在および今後の文法研究の動向について述べ、つぎの三つの特徴をあげた。第一は今までの生成文法の理論で提出されたいくつかの dichotomy, すなわち表層構造/深層構造、competence/performance, grammaticality/acceptability といった対立を考える必要(然?)性が弱まってきたこと、第二は言語の機能についての顧慮が大きくなってきたこと、そして第三は社会言語学の研究からの影響が強くなってきたことである。

最近では、アメリカの大学で日本語専攻の学生が文法に社会言語学的観点を取り入れた研究をするように指導されているところもあるようである(たとえばコーネル大学)。前にふれた discourse の研究や、語用論、発話行為 (speech-act) の研究とあいまって、この方向の研究は今後いろいろな面で進歩が見られることと思われる

る。ただここで必要なのは、さきの discourse の場合と同様、部分的な問題の分析にとどまらない、全体的な視野を持った理論への指向である。

前稿で今後の課題としてあげたものではないが、言及した話題の一つに言語情報処理関係の人たちの文法研究があった。最近では機械翻訳のブームがまた帰ってきたのだそうで、いろいろなところでの研究が目につくようである。田中穂積他一九八一は、その成果のまとまった報告の一つだ。もっとも、これは日本語の具体的な資料に基づく研究または調査の報告書ではない。最近の世界でのこの方面の研究、あるいは日本語研究の状況を紹介することを主にした、いわば勉強の報告書である。そのほか、一九八〇年秋東京で行われた COLING '80 (第八回国際計算言語学会議)では、機械翻訳関係の発表やモンタギュー文法の考え方に基いた研究の発表がいくつかあった。これらについては、「数理的研究」のところで紹介されるであろう。

ところで、前稿で筆者が取り上げなかったというより考えおぼなかった方面で進展を見せた研究がある。それは対照言語学的な研究である。

前にあげた牧野一九八〇がこの種のものであることはいうまでもないが、見おとすことのできない成果は池上一九八一である。その主要な部分は、雑誌『言語』に連載された論文で、すでに本誌の前の展望でも紹介されている。この本は本来は意味論としてタイポロジーの分野の仕事とすべきものであろうが、文法研究に含めて考えてよい性格も持っている。池上によれば、諸言語の中にはものごとをなんらかの主体とその動作または変化という観点からとらえる

傾向が強いタイプのもの、ものごとを全体的な状態またはそうな
っていく過程としてとらえる傾向が強いタイプのものがある。前
者の例としては英語があり、日本語は後者のタイプである。この本
では、日本語と英語との対比に基づいて、意味上、文法上のさまざ
まな側面の分析の結果が示される。そして考察は言語の面から言語
以外の文化の面にまでおよんでいる。この点、牧野一九八〇とよく
似た行き方である。

最近こうした対照的研究がよく行われているようで、その種の研
究のあるプロジェクトに参加している友人の話では、「木を燃やし
たけれど燃えなかった」「箱をこわしたけれどこわれなかった」な
どの言い方が可能かどうかが話題になったことがあって、そのとき
メンバーのある外国語研究者が「日本語の研究者たちは今までどう
してこういうことが気にならなかったのですかね」と不思議そうな
顔をしていたという。たしかに対照言語学的な研究は、一つの言語
だけに目を向けている場合には気がつかないことをいろいろ教えて
くれるようである。

おわりに——大文法家の時代はもう来ないのか

最初に述べたように、この二年間の研究の動きは比較的静かだっ
たかもしれない。しかし、筆者が前稿を書いたときからちょうど十
年、その間の現代日本語の文法研究の進歩はいちじるしく、相当な
知識の蓄積ができたといつてよいであろう。その背景には、一つに
は研究上の新しい観点、方法の開発（生成文法、意味的分析、談話
の分析、対照的研究など）があり、もう一つには多量の実例の調
査、分析があると考えられる。

さて、これらの研究に共通する一つの大きな特徴は、文法上の個
個の問題についての分析、検討が精密化してきた一方、文法体系の
全体像を描く方面が手うすになっていることである。もっとも、本
稿で取り上げた北原、仁田、柴谷などの仕事にはそうした全体像へ
の指向が強くなる。中でも具体化された形としては、柴谷のものが
いちばん近いすがたを示しているかもしれない。ただ、かつての山
田孝雄、松下大三郎などの大文法家たちの仕事の規模に匹敵するも
のは最近はないといふべきだろう。昔の本は活字が大きいか
らか、さも大きくなるのだなどといつてはいけない。それらの本の内
容がカバーする文法現象の範囲の広さと考察の深さ、そしてとにか
くまとめあげられたそれぞれの体系を問題にしているのである。

個々の問題の分析の精密化と、全体像の把握の努力とはたがい
に矛盾するものなのかわからないが、たしかに一方に関心が傾
くと他方がおろすことになる傾向はある。昨年湯川秀樹博士が亡くな
った直後の新聞か雑誌で、最近の原子物理学では巨大加速器やコンピ
ュータを駆使した大規模で精密な実験的研究が主となり、湯川さん
時代の紙と鉛筆で物質の世界の全体像を「哲学的」に模索する研究
は過去のものとなったという意味の記事を読んだことがある。言語
研究の世界でもちょっと似た傾向があるかもしれないとおもしろく
思った。

個々の問題について多量の実例を精密に分析した結果はのつびき
ならないもので、それを提示されると、とにかくそれに關しては文
句のつけようはないのである。それにもかかわらず、筆者はそれだ
けでは不十分だと思う。ここで「言語、とくにその文法はきわめて
ととのつた共時的体系をなす」などという公式論をふりまわすつも

りはないが、やはり個々の文法的現象はそれぞれ切りはなして問題にするだけではなくて、全体の中でどのように位置しているか、たがいどのような関係を持っているかを明示する必要があると考える。

東京西郊の住宅地の近くの小学校での話。新設校のこととて、美術専門の先生がいない。やむをえず、クラスの担任が絵も教えていた。あるとき人物をかくことになったが、そのかき方をどう教えてよいかわからない。先生は一工夫してまず子どもたちにそれぞれの手をしていねいにスケッチさせることからはじめた。後日その話を他校に勤めている美術専門の友人にしたところが、「君、そんなことで人物全体がかかるようになると思うのかい」と笑われたそうである。せっかくの精密な研究が手だけ、足だけのスケッチに終らぬことをのぞむ。

文 献

- 池上嘉彦 一九八一 『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店)
 入谷敏男 一九八一 『話しことば』(中央公論社)
 北原保雄 一九七〇 「助動詞の相互承接についての構文論的考察」(『国語学』83)
 北原保雄 一九八一 a 『日本語の文法』(日本語の世界6、中央公論社)
 北原保雄 一九八一 b 『日本語助動詞の研究』(大修館書店)
 北原保雄(編) 一九八二 『日本語文法論術語索引』(有精堂)
 北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀(編) 一九八一 『日本文法事典』(有精堂)
 国語調査委員会(編) 一九八〇(一九一六・一九一七) 『口語法』

『同別記』(勉誠社—復刻)

久野暉 一九七八 『談話の文法』(大修館書店)

牧野成一 一九八〇 『くりかえしの文法』(大修館書店)

松下大三郎 一九八〇(一九〇二) 『日本俗語文典付遠江文典』(勉誠社—復刻)

森野宗明・小松英雄・北原保雄(編) 一九八〇 『佐伯文法—形成過程とその特質』(三省堂)

村木新次郎 一九八〇 「日本語の機能動詞表現をめぐって」(国立国語研究所『研究報告集』2、秀英出版)

仁田義雄 一九八〇 『語彙論的統語論』(明治書院)

大槻文彦 一九八〇(一八九七) 『広日本文典』『同別記』(勉誠社—復刻)

サン・ジャック、ベルナルド 一九八二 「変形文法の次に来るもの」(『国語学』127)

柴谷方良 一九七八 『日本語の分析』(大修館書店)

田中穂積(松本、横山、三國、大谷木、山梨、佐藤、内田、板橋、池田、寺津) 一九八一 『自然言語処理技術と言語理論』(電子技術総合研究所調査報告二〇五号、工業技術院電子技術総合研究所)

注

ウォレス・L・チェイフ著、青木晴夫訳 『意味と言語構造』(一九七四、大修館書店)、一〇四、一〇五へおよび訳者注六〇参照。

—— 国立国語研究所員 ——